インパール戦と友の死

田川市　　皆川　義明

佐々木君は小中学を共にした親友だった。彼と印度の山中で逢い、そして敗走中再び会ったがそれが永遠の別れとなった。それはあの５万人に及ぶ戦死者を出したインパール作戦の時の話である。さて日本軍がガダルカナル島で惨敗し、南方諸島が遂次連合軍の手中に落ちる中で、ただ一つ起死回生の夢を求め遂行されたのがインパール作戦だった。旧ビルマより印度の都市インパールを攻略し、あわよくば印度を我が手中にと考えた軍閥どものはかない夢であったのだ。昭和１９年３月上旬作戦が開始された。「祭」「弓」兵団がインパールを、わが「烈」兵団はやや北のコヒマ攻略をすることであった。

チンドウイン川を渡り第１日目からけもの道の山登りが始まった。アラカン山脈は海抜３０００ｍを超ゆる峻険だ。完全軍装のほか一人当たり米１斗以上を背負っている。一個師団が、けもの道を一列に並び、あえぎあえぎ登って行く。

山登り２日目のことだ。休憩しているとすぐ前を佐々木君が登って行くではないか。私は仰天した。まさか同じ師団に彼がいるなど想像だにしなかったからだ。「おーい、佐々木じゃないか！！」彼もびっくりして「おー、皆川か」と答えた。彼の中隊は前進しているので立ち話する暇がない。「俺は師団指令部、電報班にいるからねー」とだけ伝えた。そしてコヒマで約２カ月に及ぶ死闘が繰り広げられた。私は「烈」１２４連隊第１１中隊より、師団司令部電報班勤務を命ぜられていた。

ところがその１１中隊より「ただ今、中隊長以下１１名」という電報が入り愕然とした。数日後の６月１日、師団長佐藤幸徳中将は独断による撤退を命じた。そして敗走すること１カ月雨季に入り山路は泥濘（ねい）と化す。食う物はない。村落はない。日中は敵機の跳梁（ちょうりょう）が続く。栄養失調に加え体は冷えアメーバ赤痢は蔓（まん）延する。生き残った将兵はバタバタと倒れて行く。正に血便部隊だ！！。いや幽鬼のうごめく亡霊部隊と言った方が当たるかも知れない。飛び出た目玉だけがギラギラと光る。

杖を頼りにふらふらと後退を続ける。さて、とある地点で電報作業をしていると誰か私を呼ぶ声がする。竹藪より這出て見ると佐々木君だ。「ようお前も元気だったか」と言いながら、ふと見ると、足が不自由でひきずっている。「どうした、やられたのか」と聞く。「やられて困っている」という。腿を負傷したと言う。退却当時は夜を利用し担架や馬の背で護送されていた負傷兵のことがまざまざと想い出される。今は歩けない者は自決用の手榴弾を渡され置き去りにされた。重症患者も今は一人歩きだ。担架を担ぐ兵も馬も倒れてしまったからだ。治療もして貰えないという。歩ける自分はまだましだと彼は言う。聞くだけでも痛々しい。彼はコヒマ、インパール街道の橋梁破壊をして退っていたが、壊して下がるより敵が架けてくる方が早かったという。何か食べ物でもあればと思ったが、今は一粒の米もない。それを察したか彼は金を貸してくれという。ビルマはもう近い。ビルマまで辿り着けば金が役に立つという。私はちょうど４０円持っていたので２０円彼に渡した。「では元気でね」「ビルマでまた逢おう」

と別れの言葉を交わした。しかしこの親友もその後、ようとして消息はなかった。やはりアラカン山脈の土と化したのだろうか。いやビルマの平地まで下がりチンドウイン河畔のあの白骨街道の山に埋もれたのだろうか？。戦後聞いた噂では、彼はビルマまでたどり着き空襲で防空壕に直撃弾を受け爆死したらしいと言う。これも定かではない。ともあれ２５才の若さで散華した彼を忍び冥福を祈りつつ思い出を記した次第である。合掌。

さて佐々木君と別れた翌日のことである。犬も歩けば棒に当たるとは実に味わいある言葉である。近くに馬が倒れているという。行って見るとアバラ骨だけだった。ナイフで骨をそぐと幾らかの肉片らしい物が取れた。それを飯ごうに詰めた雑草に加えて炊く。塩はないが何かの栄養にはなろう。毎日米のない雑草食ばかりだ。無情の雨は降り続く。亡霊部隊はよろめきながよら杖を頼りに進む。銃を持っていない者が多い。靴をはいていない者も多い。毛布で作った足袋（？）をはいている。２、３里歩いてはまた露営である。山の斜面に天幕を張る。雨のため木の葉は濡れているので葉の裏を上にして敷く。高さ３０㎝ぐらい積み上げて敷布用の半切れ天幕を敷き、背のう枕に休む。

しばらくすると雨はドシャ降りとなった。幕舎の上部に排水溝を掘ったが追いつかぬ。雨は背中を伝ってゴーゴーと流れる。天幕の継目からは洪水が降る。もうこうなったらヤケのヤンパチだ！！。どの幕舎からも叫び声が出始める。しばらくするとどなり声は次第に歌声に変わって行った。「勝って来るぞと勇ましく」。あーあーあの声で…。向うのテントからもこちらのテントからも、必死に歌声は響いて来る。こうして気勢を上げていないと気が滅入ってしまいそうだ。そして一夜明くればまた部隊はよろめきながら後退を続ける。何日か歩いてビルマ国境近くまで退った頃、Ｎ君が歩けなくなった。この初年兵は同郷の中学１級下で、特に面倒を見ていたので可哀相でならなかった。「何か言うことはないか」と耳元に叫んだ。何か言っているようだが聞き取れなかった。

これで我が電班員も３人置き去りにした。残る３７人はまだ生きている。生きた屍は次の地点へ向かって再び進む。７月上旬わが師団長は独断撤去のかどにより罷免された。ここに於て師団長は最後の電報を軍、方面軍及び大本営にあて発した。私達は電文を暗号化しつつ涙した（電文は割愛）。この師団長の最後の叫びが功を奏したのか、インパール攻撃は中止されたのである。さてこれより白骨街道へと続くのである。我が電報班員の殆んどが倒れ、残ったのは４０名中僅か９名だった。そして我が司令部がビルマ中央のシエボに到着したのが昭和１９年９月１１日のことだった。約半年にわたる死闘の中で雨と泥ねいと密林に５万に及ぶ白骨を残したのである（後日談）。

ビルマ近くまで来て倒れた同郷のＮ君の実家に、戦後約１年した昭和２１年７月末訪れた。彼は中学１級下であり、田川市内でお袋が花屋をしていた。戦死時の状況など知らすべく…。ところがお袋さんは戦死の公報がまだ来ていないと言う。私は『しまった！！』と思った。置き去りにした人の生死は不明だということに気付いた。これ以上話すことをためらい、住所氏名を告げ立ち去ろうとした。ところが横で聞いていた妹さんが突然声を上げて泣き伏した。「あの夜兄ちゃんが夢枕にたった日兄ちゃんは死んだんだ！！」と泣きじゃくった。合掌